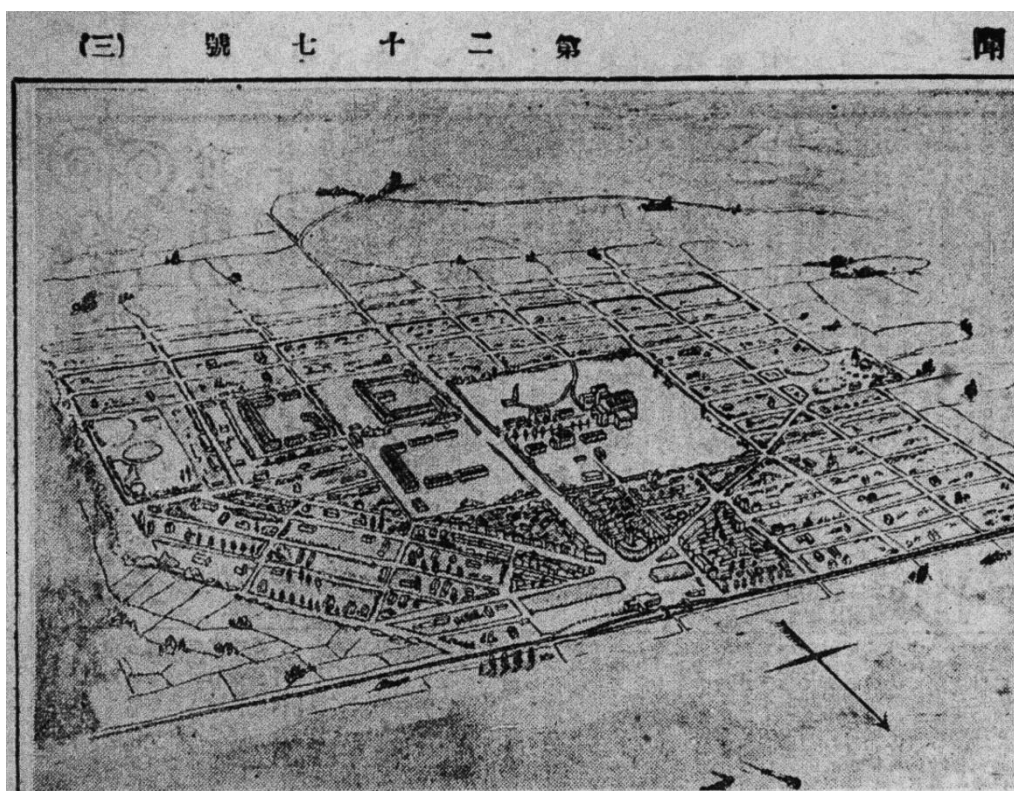




資料1は、国立大学町を開発した箱根土地株式会社（以下「箱根土地」とします。）が配布した国立の分譲地販売の案内です。

この案内には「商大に縁故ある校友学生及其の関係者の方々」に限定して特別待遇の地価の割引をすると謳われていますので、東京商科大学（現 一橋大学）の関係者へ送付するために作成されたものとみられます。また、同大学の大学新聞『一橋新聞』第27号（大正14・1925年11月15日）に、資料1の鳥瞰図とほぼ同じ構図になる素描（資料2）が掲載されていることから、鳥瞰図はこの時期ぐらいに描かれていたであろうと考えられます。鳥瞰図裏面の宣伝文に「秋色酣なる此地に御散策旁是非御視察を願ひます。」とあることをも鑑れば、大正14年10月前後に作成された案内ではないでしょうか。

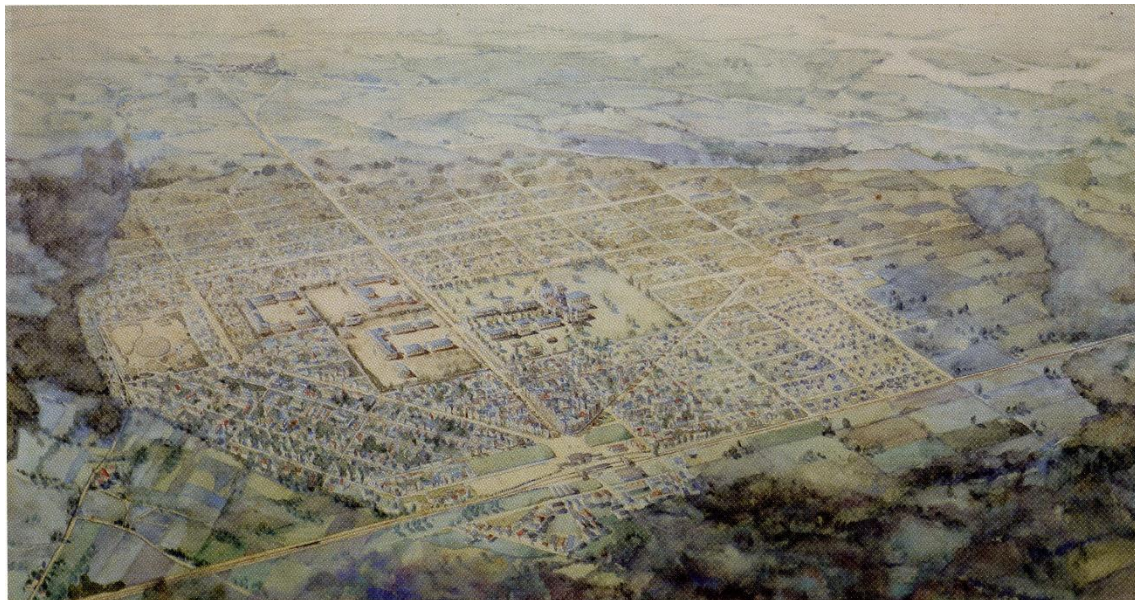


資料2 本学を中心とする大学都市の想像鳥瞰図  
『一橋新聞』第27号（大正14・1925年11月15日）3面  
一橋大学附属図書館所蔵

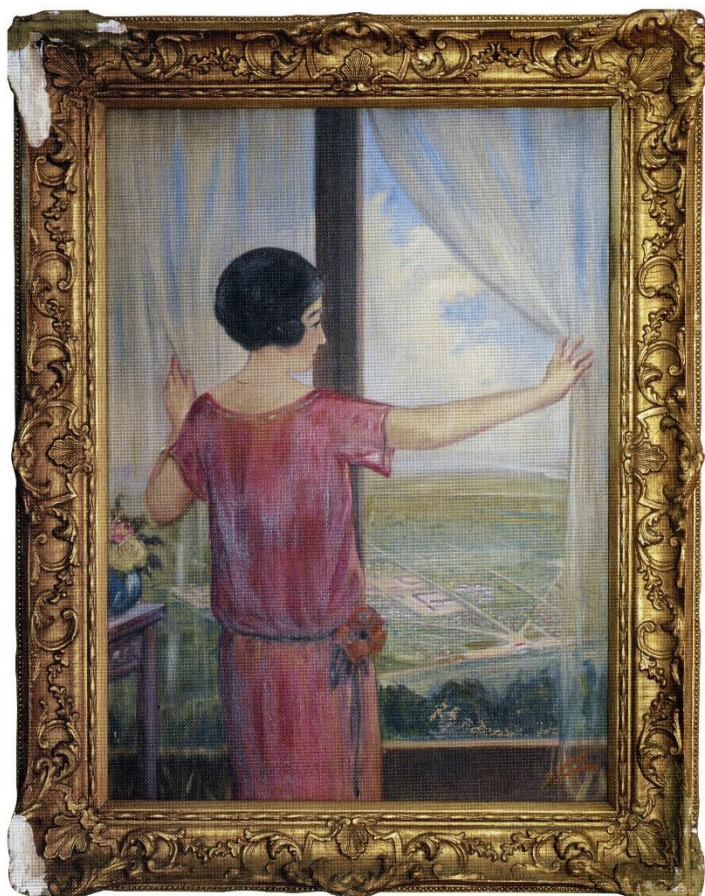
なお、資料1にある鳥瞰図と同じ構図になる水彩画（資料3）と、鳥瞰図と同じ街並みを眺めている女性を描いた油絵（資料4）が、箱根土地で国立大学町の設計に携わった中島陟氏が遺された資料中に現存しています。資料3をよくみると、資料1の鳥瞰図ではみられない、国立駅北側部分に住宅地らしき描写があり、彩色が鳥瞰図とは幾分異なる部分がみられます。ただし、資料3に描かれた施設や街並みは資料1の鳥瞰図と一致していることから、資料3に基づいて資料1の鳥瞰図が作成されたのではないかと考えられます。

なお、東京高等音楽学院（現 国立音楽大学）が国立に移転するに際して、同校の周辺の住宅地を音楽家や音楽愛好家のための「音楽村」として整備し、分譲販売することが計画さ

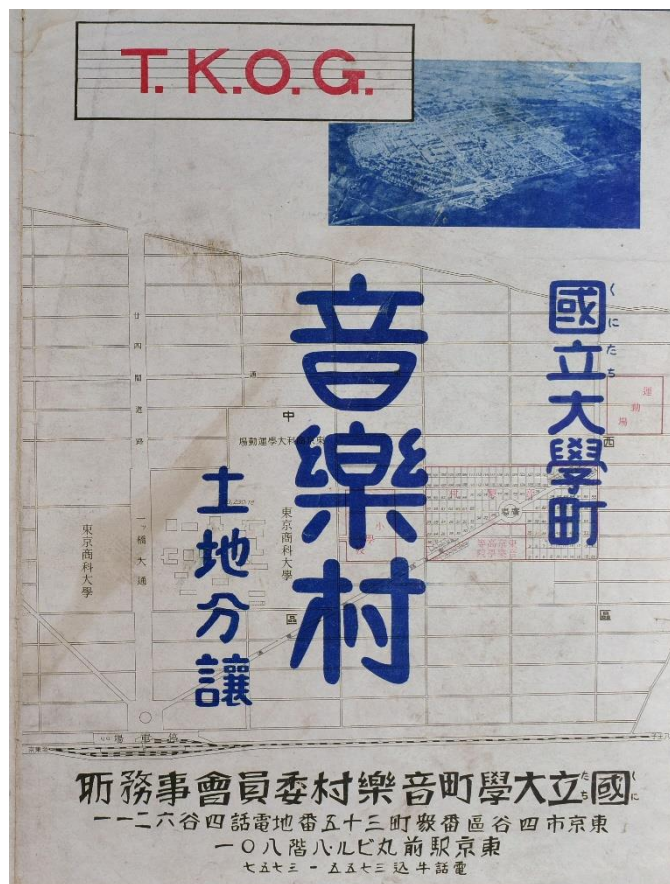
れていました。その音楽村の分譲案内にも、資料 3 に基づくとみられる鳥瞰図が掲載されています。その図では国立駅北側部分の住宅地らしき描写も認められ、より資料 3 に近いものであることが分かります。



資料 3 国立大学町鳥瞰図 大正 14 (1925) 年 明窓浄机館所蔵 (中島陟資料)



資料 4 国立大学町を眺める女性像 大正 14 (1925) 年 明窓浄机館所蔵 (中島陟資料)



資料 5 国立大学町 音楽村土地分譲 大正 15 (1926) 年 くにたち郷土文化館所蔵

①資料 3、②資料 5 の部分拡大、③資料 1 の鳥瞰図、3 点の比較

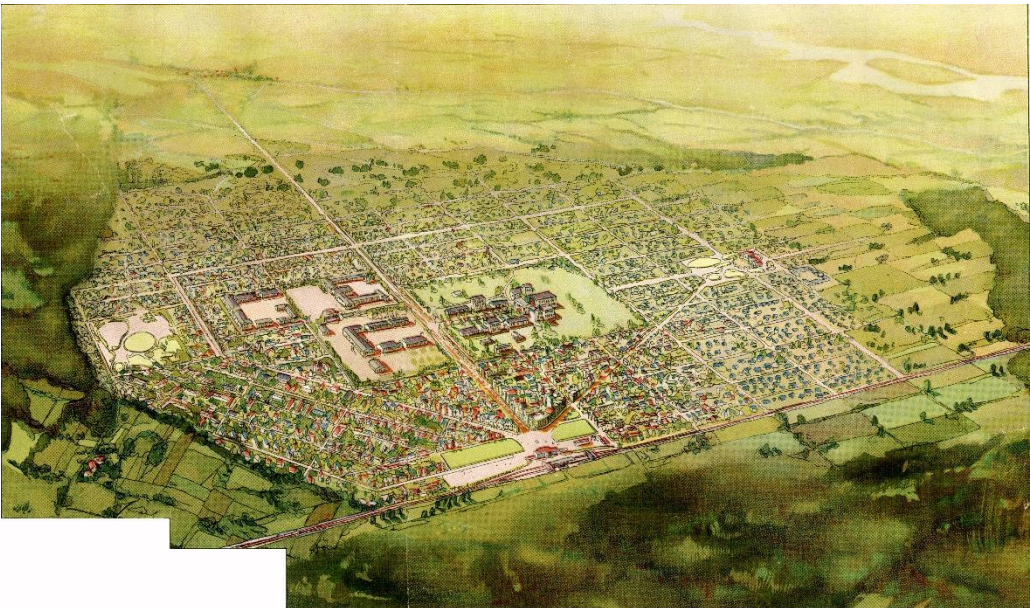
①



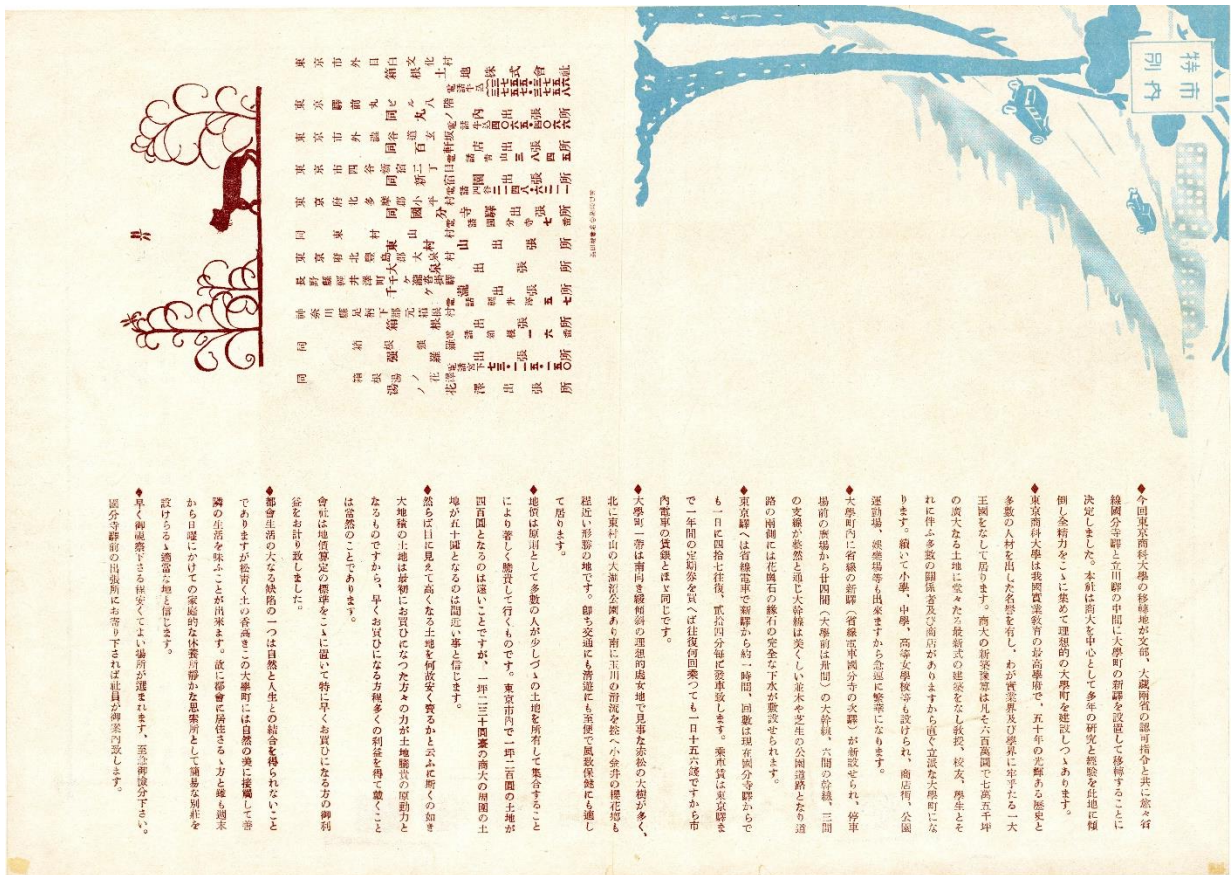
②



③



国立の土地分譲案内は何種類か存在していますが、その中でも資料 1 の案内は最初期に作成されたものと考えられています。なお、『国立の大学町鳥瞰図』と題する分譲案内には、鳥瞰図裏面の宣伝文が資料 1 とは異なるタイプのものが存在しています。こちらには東京商科大学関係者への特別待遇といった文言が入っていませんので、一般向けの分譲案内として作成されたものとみられます（資料 6）。



資料 6 『国立の大学町鳥瞰図』の宣伝文 大正 14 (1925) 年頃 くたち郷土文化館所蔵  
この宣伝文の裏面は、資料 1 と同じ『国立の大学町鳥瞰図』となっています。

ここからは、資料 1 の『国立の大学町鳥瞰図』にフォーカスして観察してみましょう。  
鳥瞰図には、「約三千坪の駅の広場からは一直線に廿四間の立派な大幹線道路と左右に二条の放射幹線道路が整然として最短距離でこの家にも行かれます。」と説明が付されています。描かれた図からは、現在の国立駅南口駅前広場や大学通り、富士見通りや旭通りといった主要な道路等のプランが概ね出来上がっていることをみて取れます。  
ただ、描かれた旭通り北東側の街区のパターンが現状と異なっている点にお気づきいただけるでしょうか？富士見通りの北西側は現在と同じく南北方向に格子状となるパターンで描かれていますが、旭通り北東側は旭通りと並行するように各ブロックが描かれており（図 1）、その後造成された南北方向に格子状となる街区のパターン（現在と同じパターン 図 2）とは異なっていることが分かります。

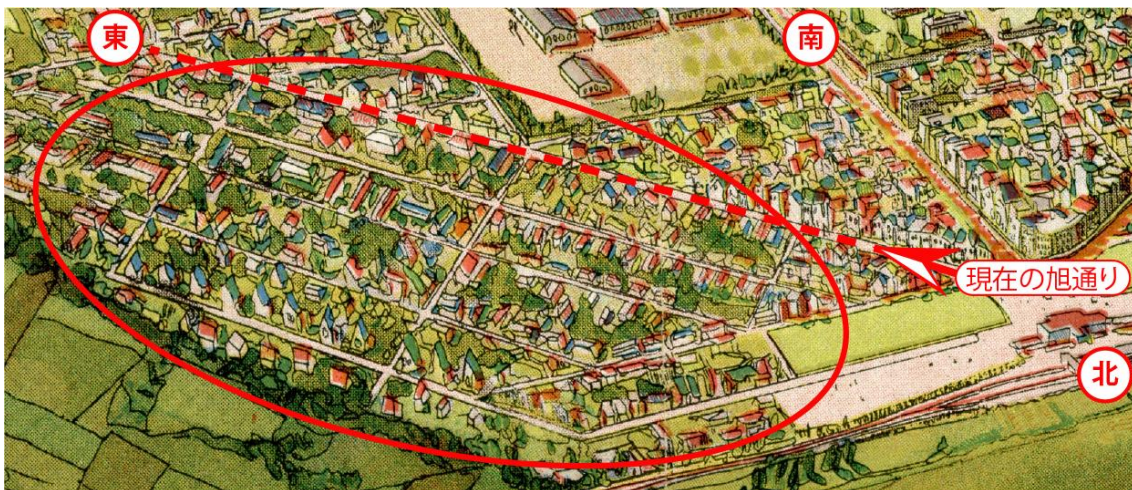


図 1：旭通り北東側の街区（資料 1 の部分拡大・加工）

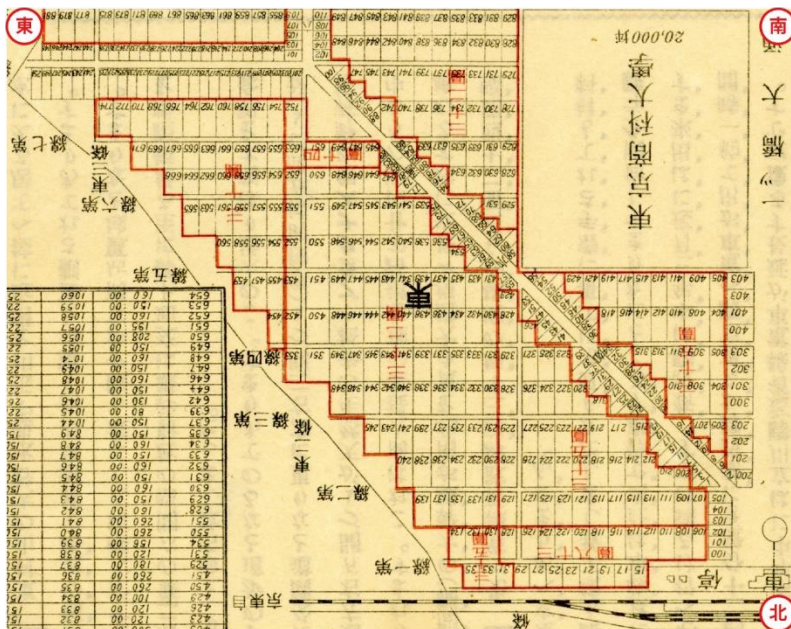


図 2：館蔵『国立大学町分譲地区画図』の一部（上下を反転：下が北方向）

大正 15 年初め頃とみられる分譲案内。現在の旭通り（図中の表記は「如水通」）の北東側（如水通の下側）は、他の街区と同じく、南北方向に格子状となるパターンに区画されています。

さらに、説明書きでは「国分寺と立川駅の間なる大学町の新設駅を下車すると駐車場も大学町らしい見るからに気持のよい建築」と述べられていますが、「国立」を冠した駅名（駐車場名）はまだ登場していません。描かれた駅舎も赤い屋根ではあるものの、その後竣工された三角屋根の駅舎とは趣が異なります（図 3）。この段階では駅名や駅舎デザインがまだ確定していない状況が窺われます。

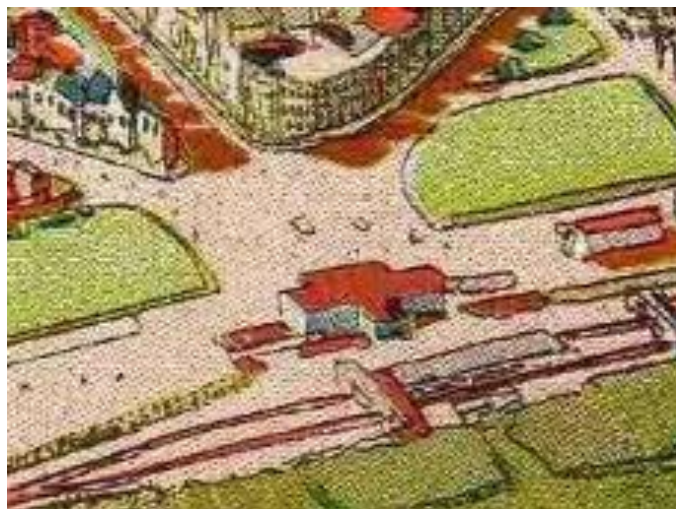


図 3：駅舎および駅前広場周辺（資料 1 の部分拡大）

資料 1 の鳥瞰図で大学町の東西に目をやると、公園や遊園地のような施設が描かれているのが目に留まります (図 4・5)。説明書きに拠ると、「劇場、活動写真館」、「中央広場や公衆運動場」といった施設の建設が目論まれていたことが知られます。大学町居住者に娯楽を供するための施設をまちの東西に配する、そのような構想を描き込んだ可能性が考えられるところです。

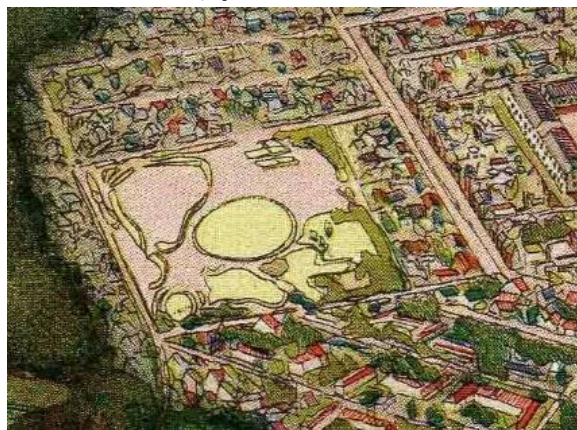
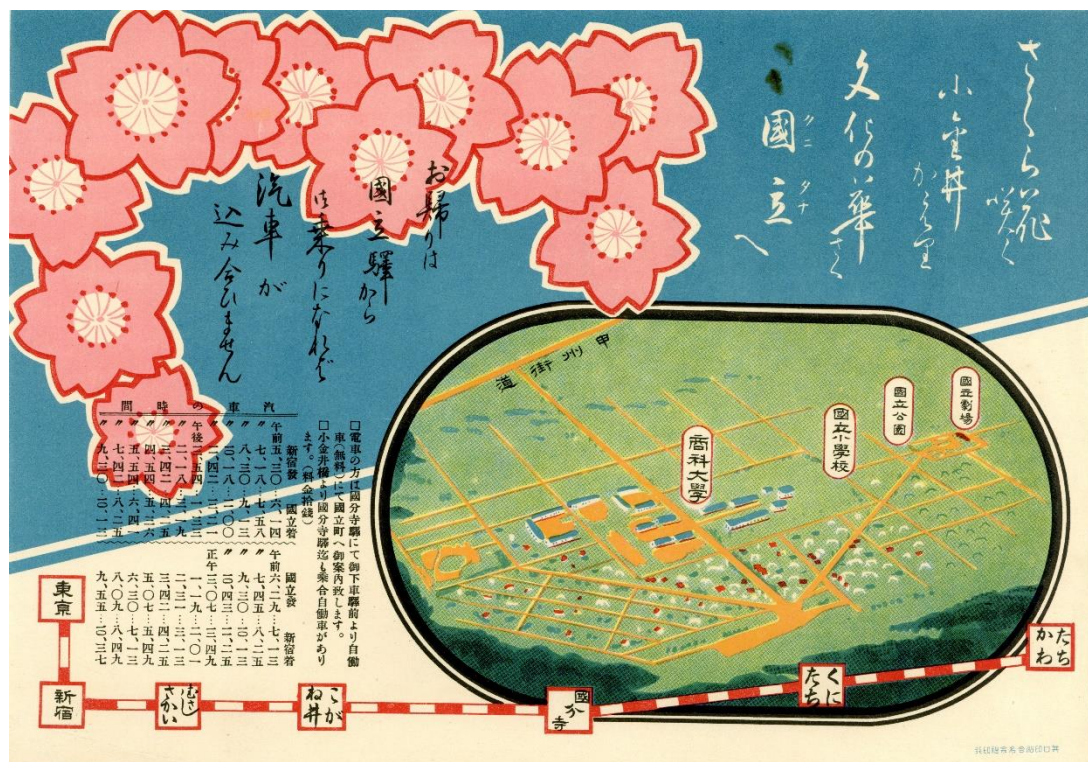


図 4：大学町東側の施設 (資料 1 の部分拡大)



図 5：大学町西側の施設 (資料 1 の部分拡大)

なお、箱根土地が大正 15 年 4 月頃に作成したとみられる国立案内のチラシには、資料 1 の鳥瞰図をベースとした図が掲載されています。その図では、ちょうど図 5 の位置に「国立公園」「国立劇場」との記述がなされており、当初の施設計画を窺い知ることができます。



資料 7 国立案内 大正 15 (1926) 年 くたち郷土文化館所蔵「さくら花咲く小金井かえり文化の華さく国立へ」と謳った案内。気の利いたキャッチコピーを添えて、桜の名所として名高い小金井の花見客を国立へと誘い込もうとしています。

そして大学町中央にある東京商科大学を中心として、その他の教育施設を隣接して配したかのような描写も見逃せません。描かれた大学の校舎は、後に建設されたものとは配置等に相違がありますが、大学通りを挟んだ東西の大学用地は概ね決まっていたことがみて取れます。その大学通り東側の大学用地の南に接するように建物群が東西に並んで描かれているのがお分かりになりますでしょうか（図 6）。鳥瞰図の説明書きでは「商科大学のほかにも中学校、女学校、小学校」が逐次建設されると記していますので、大学に隣接してこれらの学校を配置する予定があったとも考えられます。

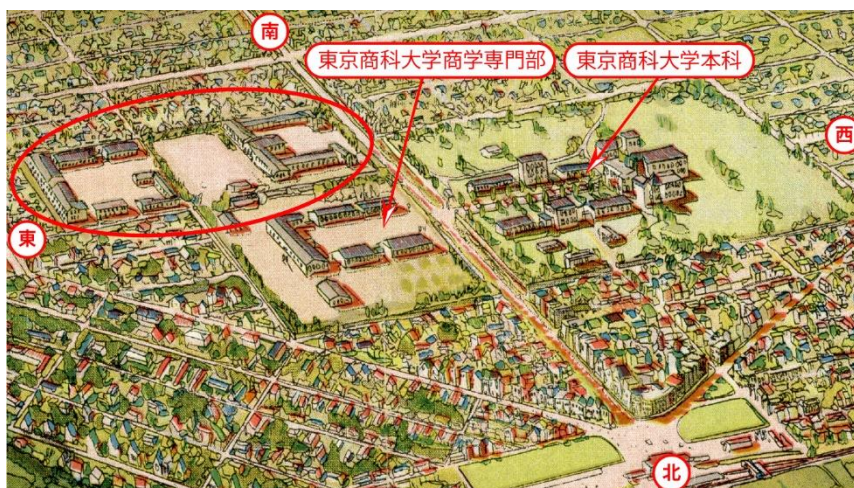


図 6：大学に隣接する施設（資料 1 の部分拡大・加工）

この点は、『一橋新聞』第 27 号（大正 14 年 11 月 15 日）で「専門部の南隣にはなほ万余坪の土地を区画し置き大学移転となるべく同時に小学校を、それから六年以内に中学校及び高等女学校を、夫々本学関係者の手で開校させようといふ企てもある。」<sup>1</sup>と報じているのが参考になります。この記述からして、やはり図 6 で大学の南側に隣接（「専門部の南隣」）して描かれた施設は、小学校や中学校等の学校が想定されていたものとみてよいでしょう。

大正 15 年初め頃の方議案内とみられる『国立大学町分譲地区画図』でも、この学校等の描かれた場所を、一般の方議地以外の区画として確保している点が認められます。

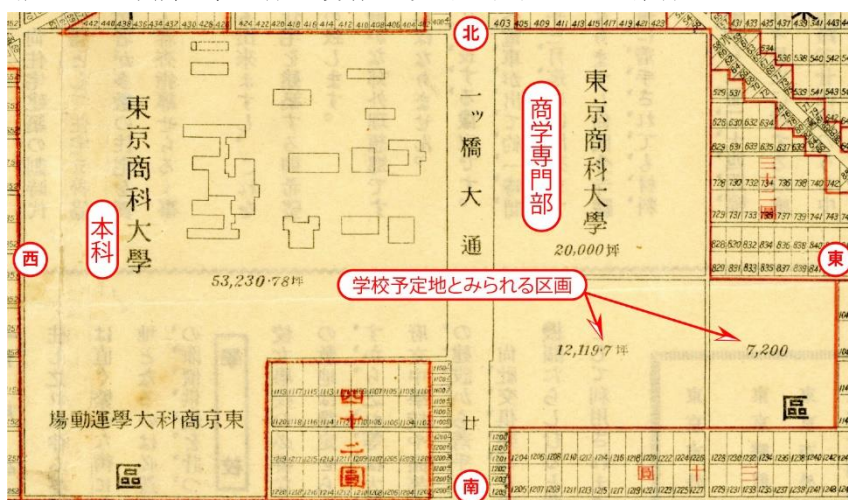


図 7：館蔵『国立大学町分譲地区画図』の一部に加工

<sup>1</sup> 『一橋新聞』第 27 号（大正 14 年 11 月 15 日）2 面「東京西郊谷保村に本学移転敷地決定す」



区画図の裏面にある「国立大学町の施設概要」に、「大学町に於ては既に之れ等〔幼稚園・小学校・中学校・女学校：引用者〕の敷地は予定せられ商大教授各位が御世話下さる事になつて居ります」（下線は引用者）と記されているのも、この区画が学校等の予定敷地であろうことを窺わしめるものです。最初期の大学町のプランでは、教育施設の集約的な配置が考慮されていた、そのようなことを考えさせる描写といえます。

資料 1 の鳥瞰図では駅周辺から大学等の教育施設にかけて、赤や緑、青色の屋根の住宅とみられる建物が密集して描かれています（図 8）。この描写は、箱根土地が分譲した目白文化村の情景が念頭にあったのではないかと感じられるのです。“文化住宅”と称された様々な様式をまとった建築、あるいは「赤い屋根瓦が震災〔関東大震災：引用者〕前の象徴であれば、緑の銅板葺は震災後の屋根を表現したもの」<sup>2</sup>とも言われた瀟洒な洋風の街並み、そのような住宅地が想定されていたのではないのでしょうか。

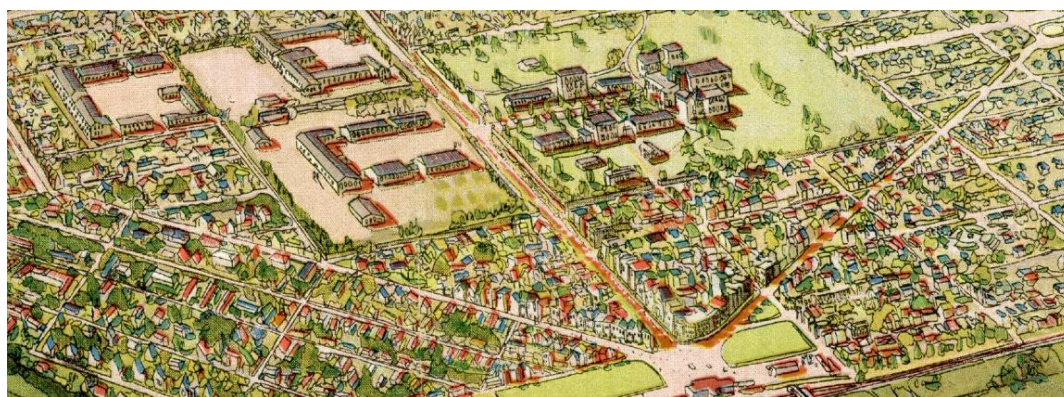


図 8：住宅地の描写  
（資料 1 の部分拡大）



資料 8  
 絵葉書：目白文化村（第 2 文化村）分譲案内  
 新宿区立新宿歴史博物館所蔵  
 目白第 1 文化村の住宅地の様子を撮影した写真に着色をなした絵葉書。  
 瀟洒な洋風住宅が立ち並んだ当時の美しい住宅地の様子を見ることができます。

<sup>2</sup> 「目白文化村の一住宅を見る」『主婦之友』大正 13（1924）年 2 月号。

さらにこの住宅地の描写からは、東京商科大学の国立移転を主導した佐野善作学長による「理想的の大学都市は理想的の高尚な住宅地に囲まれてこそ初めて実現せらるるのである」<sup>3</sup>との言説が想起させられるところでもあります。教育施設の周囲に、閑静な住宅地が広がっている、そのような理想的な大学町が描き込まれたものだったのでしょう。

分譲地案内に掲載された鳥瞰図を通じて、国立のまちづくりの初期プランを覗いてみました<sup>4</sup>。国立の大学町の開発には、東京商科大学と箱根土地との間で交わされた契約、あるいはその細部を記した覚書などによって規定されていたであろうところもみられます。そのような内容も踏まえると、鳥瞰図をより掘り下げて読み解けるのですが、この度は鳥瞰図そのものから読み解いてみました。鳥瞰図を細かに観察すれば、まだまだ面白い発見をすることができそうです。何かしらお気づきの点がありましたら、当館までお知らせください。皆さんからの情報をお待ちしています。

【2020.05.11：中村記】

---

<sup>3</sup> 『一橋新聞』第27号（大正14年11月15日）1面「本学移転地の決定に際して 学長 佐野善作」。

<sup>4</sup> この度の展示資料の紹介は、「くにたち公民館だより」第715号（2019年9月5日）に掲載した文章を加筆・修正し、図版の追加と改訂を加えて再編成したものです。